

東京大学史料編纂所所蔵

大日本維新史料稿本 マイクロ版集成



ESTABLISHED IN 1869
MARUZEN



東京大学史料編纂所 所長
益田 宗

東京大学史料編纂所の所蔵する数多くの史料の中でも、「大日本維新史料稿本」4217冊は、質量両面において誇りうる屈指の大史料である。

幕末維新期の膨大な史料の蒐集・編纂作業は、既に明治前半期において、史料編纂所の前身である太政官修史局や、旧大名家家史編纂所の連合体的性格を有していた史談会などによって試みられた。だが、この事業が本格化したのは、日露戦争後の明治43年、長州出身の元老井上馨が中心となって組織した維新史料蒐集団体彰明会の成立に始まる。そして同年12月、明治天皇より彰明会の事業に対し1万円が下賜されたことによって、なれば公的な事業に発展し、更に翌明治44年5月、彰明会の事業の發展的解消として文部省維新史料編纂会が勅令によって発足し、同会の事務掌理機関として文部省維新史料編纂事務局が同時に組織された。

大日本維新史料稿本の 刊行に当たって

発足をめぐる経緯からも明らかのように、この事業は当初、天皇制国家の正当性を証明する目的をも持たされてはいたが、事業の進展にともない、続々と蓄積・整理・編纂されていく史料稿本は、イデオロギー的側面よりも、歴史学的に第一級の學問的史料という性格を強めていったのである。史料蒐集の対象は、公家華族や全国の旧大名家、幕末維新の変革過程に参加した数多くの志士や草莽層の史料だけにとどまらず、旧幕府や旧幕臣の史料、英米独仏等の在外外交文書、更には写真・錦絵・絵巻物等の画像史料にまで拡大されていった。そして史料蒐集の過程で発掘された良質の諸史料は、大正前期より、編纂事務局の外郭団体日本史籍協会によって次々と出版され、明治維新史研究の史料的基礎となっていました。

このような精力的な史料蒐集をふまえ、孝明天皇の践祚(弘化3年2月13日)を上限とし、廃藩置県(明治4年7月14日)を下限とする史料稿本の編纂が年とともに進展していった。早くも事業開始後3年目の大正2年には13冊が作成されており、昭和6年、全時期をカバーする基礎稿本4180冊が完成した。この基礎稿本に更に増補修正をおこなった増補版史料稿本4215冊の編纂が完了するのが、昭和13年3月のことである。そして、その後践祚直前の弘化3年1・2月分が附され、最終的

な稿本冊数は4217冊となったのである。

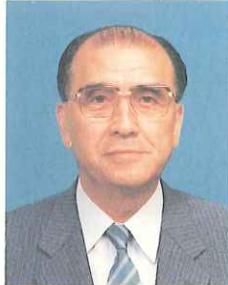
ところで、史料稿本は綱文を立て、その後に関係諸史料を収録する体裁をとっているため、学界の要望に答えるべく、まず稿本の綱文及び史料出典を示した『維新史料綱要』全10巻が昭和11年より18年にかけて刊行された。ひきつづき、弘化期より安政期にかけての史料稿本142冊が、昭和13年より18年にかけて『大日本維新史料』として19冊ほど出版されたが、太平洋戦争の激化にともない、刊行は中止された。

ところで、戦後、政治情勢が一変したのにともない、昭和24年3月、文部省教科書局所管維新史料掛(旧維新史料事務局が改組されたもの)は、その史料稿本及び膨大な所属史料・図書とともに、東京大学史料編纂所に移管され、維新史料編纂事業は史料編纂所所属となって再出発することになったのである。

上に述べた如く、史料稿本は、戦前、明治末から昭和10年代にかけて、国家的事業としてとりくまれた史料蒐集・編纂事業の結晶体であり、その包括性と精密性においては、他に類例を見ないものである。維新史の基本的諸事実の実証的確定はこれによって完了したといつても過言ではない。また収録された一点ごとの史料には、必ず原所蔵者・所蔵機関名が付されており、それを手掛かりとして原史料に当ることも可能である。この点においては、史料稿本そのものが、驚くべき数にのぼる幕末維新諸史料のきわめて詳細な文献目録となっているのである。更に、太平洋戦争の戦禍によって、収録された史料の内原史料の多くが焼失したり、行方不明となり、そのような原史料に関しては、今日、史料稿本が唯一の典拠となっている。

史料編纂所としては、このような貴重な史料的価値に鑑み、文部省から移管された数多くの編纂事務局蒐集諸史料・書籍類とともに、史料稿本を整理し、来所する研究者や自治体史編纂者の方々に公開してきた。また、現在、文部省科学研究費補助金の援助を受け、『維新史料綱要』全10巻の全文テキストを電算機に入力中であり、この情報は学術情報センターを介して、国内外は勿論、国外の研究者も入手することが可能となっている。

このような状況のもとで、今回、「大日本維新史料稿本」全4217冊が、高度な撮影技術のもと、マイクロフィルム化されることになったことは、私として、日本の近代化の原点たる幕末維新期に専心を寄せ、調査し、研究している国内外の多数の人々の学問的便宜を計る面からも、また貴重史料の長期的保存を計る面からも、極めてよろこばしい。今後、このマイクロフィルムが、国内外の研究者を始めとする多くの人々によって利用され、明治維新史研究が、更に一層発展することを、心から念願するものである。



明治維新の世界史的意義が問い直される

札幌学院大学教授・
北海道大学名誉教授
田中 彰

歴史はすべて現代の歴史である、といわれる。歴史は現代と過去とのつくることのない対話だというのも、同じことだ。

その現代が、国際化と価値観の多元化によって、明治維新的意味を問い合わせているのである。

これまで明治維新的訳語は一般にMeiji Restorationだったが、最近ではMeiji Revolution, Meiji ReformあるいはMeiji Ishinなど、さまざまな語が当てられはじめている。

明治維新は、長い苦難にみちた研究史をもつが、その歴史的意義はもはや近代日本の出発点というにとどまらなくなってきた、といってよい。とりわけ、現在、後発国として近代化や現代化を進めつつある国々にが、その國のもつ特性と、それをとりまく国際的状況のなかで、新しい国家体制をいかに創出し、どのように展開させていくかという課題に立ち向かおうとするとき、明治維新はひとつのカギと考えられはじめているからである。

ところが、その維新変革の内的条件と外的要件との綾なす複雑・多岐な構造は、十分に解明されているかというと、まだまだこれからといべきだろう。

そうした現状を克服するためには、もう一度明治維新的基礎的な史料を、新しい視座によって洗い直す以外にはない。

そのもとも基本となる史料として、東京大学史料編纂所所蔵の「大日本維新史料稿本」がある。

維新史料編纂会が文部省に設置されたのは、1911年(明治44)だった。これは1888年(明治21)にできた史談会を継承し、薩長の元老たちの発起になる。そこには薩長両藩中心の維新史を国家事業として編纂する意図があった。

しかし、この編纂会は西南雄藩主導の色合いを残しながらも、しだいに脱却して、維新史の事実の基礎調査、関係史料の広範な収集などを行なうアカデミックな維新史編纂の機関となった。「大日本維新史料稿本」は、この維新史料編纂会によって作成されたのである。

この稿本は「大日本史料」を範として編纂された。

いま、その稿本作成の過程をみると、1913年(大正2)の13冊からはじまって、1926年(大正15・昭和1)には3,022冊に達し、1931年(昭和6)の設置満20年には4,180冊となり、一応完成し

た。だが、その後も史料収集は続けられ、稿本の増補・修正が行なわれ、1938年(昭和13)までに、結局、総冊数4,217冊に及んだのである。

この稿本の綱文および史料出典を示す『維新史料綱要』(全10巻)は、1936~43年にかけて公刊され、また、この稿本をもとにした『維新史』(全6巻)と『概観維新史』(全1巻)は、太平洋戦争開始直前までに出版された。

一方、稿本の方は、そのごく一部が『大日本維新史料』として公刊されたものの、いまだに大部分は未刊のままである。

稿本4,217冊は、当初200巻で完結と予定されたが、後日大きな計算ちがいがあることがわかり、500巻近くなるといわれているものだ。

だとすると、この稿本がすべて活字化されて陽の目をみるのには、気の遠くなるような先のことになる。

気が遠くなるといえば、私もかつて東大史料編纂所に通い、この稿本を一枚一枚めくったことがある。しかし、万延元年3月3日の井伊直弼の「桜田門外の変」当日にいたると、この日一日の稿本だけでも、それは書架に1メートル以上もあって、絶望感に襲われた記憶がある。

今回、その膨大な稿本がマイクロ化されたのだ。マイクロ化されれば、さきの『綱要』を手引きとし、『維新史』などを参考にしながら、必要な史料を必要に応じて容易に引き出すことができる。維新史の史実それ自体も、そこからもう一度洗い直すことも可能なのである。

明治末以降、ともかく国家が膨大な予算をつぎ込んで作成したこの「大日本維新史料稿本」が、いま身近な史料として、われわれの前に提供されるのである。

20世紀末から21世紀にかけての世界の激動のなかで、明治維新が日本という国家の発展と世界史的規定性の上に、アジアにおけるいかなる変革であったのかが、新しい観点からの稿本検討によって明らかにされる日もやがて来るだろう。

それは明治維新の、日本そしてアジアの近代への「革命」的意義が、国際的視野のなかで問い合わせられるということだ。

それは現代の歴史がいちだんと豊かになる、ということでもある。



維新史研究を飛躍させる画期的な刊行

北海道大学教授
井上 勝生

東京大学史料編纂所は、以前に大日本維新史料稿本のフィルムのコピーを許可されたことがある。小野正雄さんや宮地正人さんをはじめ、史料編纂所のかたがたのご助力をえて北海道大学文学部にコピーフィルムを設置させていただいた。そのコピーフィルムはいわゆる「裏写り」などもあり、研究のためのものといってよいのであるが、日本史研究室の貴重な財産となっている。大日本維新史料稿本は、もちろん史料編纂所において公開されていたのであるが、現存4217冊の膨大な史料を閲覧にゆくのは、たやすいことではないのである。実用的とはいえコピーフィルムがある便宜は實に大きいものがあった。

私が最初に大日本維新史料稿本の「威力」を実感したのは、長州藩の幕末の御前会議を研究したときである。研究者の間で貴重な史料として知られてはいたが、読解の難しさと量の多さのためにほとんど利用されることのなかつた「浦瀬負日記」(山口県文書館現蔵)を、大日本維新史料稿本がふんだんに抄録していることに気付いたのである。稿本によって同日記を利用する重要な手がかりを得ることができた。次に、幕末の関東の豪農根岸家と長州藩のつながりを研究したときにも、長州藩のスクーネル船の関係史料で稿本がたいへんに役立った。スクーネル船は幕末には多くの藩で造られており、長州藩建造のそれはいわばマイナーな問題なのである。にもかかわらず、大日本維新史料稿本に収集されている毛利家文庫などの関係史料は、また驚くべきものであった。プリントで読んでもたいしたものではなかろうといきなりプリントアウトにとりかかった私は、ずばらのしっぺ返しを見事に食らったのであった。

その後、幕末維新期の天皇・朝廷の研究でも大日本維新史料稿本は史料収集にあたっての導きの糸であった。1868年の明治天皇の即位式についての覚え書き、また同年の天皇誕生日と、1858年の条約勅許問題についての論文を書いたのであるが、この分野についての稿本の史料の博捜は研究者一個人の可能な範囲をはるかに超えるものであった。たとえば公家の日記をみると、橋本実麗、山科言成、五条為定、甘露寺勝長、野宮定祥、高辻以長、土山武宗、徳大寺公純、中御門経之、長谷信成、東坊城聰長、坊城俊克、六角博通などの日記が抄録されている。そして、稿本作成当時の史料の現蔵者が記されているのである。

稿本を原本と照合してみると付図などの省略がある。また、抄録はあくまでも抄録なのであって、その限界も心得るべきであろう。しかし、旧文部省によって国家的事業として史料収集が行なわれた威力は否定すべくないのである。すでに刊行されている『維新史料綱要』10巻は編年体で綱文をかけ、その後に史料名を掲げているが、それが稿本のほぼ正確な目次となっている。のちに行なわれた増補のために『維新史料綱要』にあげられた以外の史料も掲げられているのは、余祿とすべきであろう。

私は、学生諸君が卒業論文で明治維新史をテーマに選んだときには、迷わず大日本維新史料稿本を検索することを勧め、その膨大な史料群は、あたかも何百の論文の題材を未発掘のまま埋蔵する鉱脈のようなものだと力説するのを常してきた。それは、かつて行なわれ、刊行事業の半ばで挫折した組織的史料収集の「威力」を前にした私の偽らざる感慨である。知られているようだ。大日本維新史料は、戦前、戦中にかけて19冊のみが刊行された。もしその事業を継承するとするならば、数百冊の刊行事業となるであろう。この貴重な史料は、いざれは刊本として公刊してほしいものである。しかし、今の現実的な手段としてマイクロフィルムによる出版をきめられた関係者のかたがたの選択は適當だと思う。近年、さまざまの維新史関係史料の公開や調査、公刊などに精力的に取り組まれてきた史料編纂所維新史料部のかたがたにもあらためて敬意を表したいと思う。

大日本維新史料稿本には王政復古史觀に由来する歴史觀の偏りがあるとよく書かれており、事実そうした傾向はあると思うが、丹念で大規模な史料の収集は、現在においても、旧幕府についてすら、断然抜きんでているといわなければならない。これは『維新史』を含めて、旧維新史料編纂会の仕事の全体をどのように評価するのかという問題とも絡むであろう。こうした実証性の裏付けとなつたのは王政復古史觀とは別の流れによるものと私は考えているのである。戦後の歴史学の進展によって維新史の研究も前進したが、浦瀬負日記を例にあげたように、こうした戦後の実証研究の到達を大きく上回るものを大日本維新史料稿本はもつてゐるのである。マイクロフィルム化が完成し、広く市販されることを喜び、その活用によって維新史研究の水準が大きく飛躍すると確信する次第である。



大日本維新史料稿本と私

中央大学助教授
松尾 正人

私が大日本維新史料稿本をはじめて手にしたのは、大学院の修士論文に取り組んでいた時であった。東京大学の史料編纂所の閲覧室で、稿本の最初の1冊を繰ったその時の感動は、今でも忘れられない。冬休み明けだったせいか、静かな室内であった。

書庫から出していただいた大日本維新史料稿本は、編年体の各事項ごとに史料が薄い罫紙に淨写され、ていねいに綴じられていた。稿本を繰っていくと、そこにはすでに原本が失われてしまった史料の写しがあった。膨大な量の日記・書翰や諸記録の原本から、各事項に関係した史料が見事に転写されている。淨写された罫紙を繰るたびに胸がおどった。稿本は、まさに明治維新史の宝の山であった。

それから20年、私は明治維新史の勉学の折々に史料編纂所にお世話になった。とりわけ大日本維新史料稿本は、たびたび活用させていただいた。つい最近も、明治維新期の下総国生実藩を調べるために史料編纂所に通った。生実藩については、「生実藩主森川家旧蔵史料」が千葉県立中央図書館に所蔵され、立派な目録ができている。その目録を書肆で偶然に入手して以来、いつの日か下総国の生実藩の明治維新を追究してみたいと思っていた。だが、実際に生実藩の研究に手を付けてみると、史料の収集はそんなにかんたんではない。なかなか期待したようには進まなかつた。千葉県立中央図書館の史料も、私自身が必要とした類は十分でない。あれこれ探したが、結果はやはり史料編纂所。「生実藩主森川家旧蔵史料」に不足した分は、史料編纂所の大日本維新史料稿本と旧藩の家記・写本類を頼りにしておぎなつた。史料編纂所の宮地正人教授からは、『復古記』原史料を教えていただいた。

もっとも、このような私の大日本維新史料稿本の利用は、しょせん史料のつまみ食いで、本格的な研究とはいえない。編年体で整理された大日本維新史料稿本は、明治44年に設置された維新史料編纂会の長年にわたる事業の集大成である。現在、東京大学の史料編纂所に所蔵されている稿本は、総計4217冊におよぶ。この貴重書を、史料編纂所のカーボンを挟んだ短冊型の請求票に捺印し、書庫から出していただいても、私の微力な筆写はいかほども進まない。気の遠くなるような遅々とした作業

である。それでも、大学院生のころは史料編纂所に通うこともできたが、教員になってからはなかなか思うにまかせず、焦躁感ばかりがつのった。

今回、この膨大な量の大日本維新史料稿本のマイクロ版が出版されるという。大変な快挙である。稿本はまさに幕末・明治期の史料の宝庫で、維新史研究の枢要に位置している。私自身は、昨年、勤務先の中央大学で少しずつでも稿本のマイクロフィルムを入手したいと考え、史料編纂所にお願いしてその部分的な購入に着手していた矢先きであった。

この度のマイクロ版の出版では、大日本維新史料稿本のすべてが一時に発売される。マイクロフィルム化に際しては、新たに周到な撮影をおこない、利用の際の検索などにも万全を期したようだ。これまで稿本を閲覧する場合には、『維新史料綱要』を項目の索引とし、その詳細については編年の稿本を1冊ずつ繰っていく以外に適切な方策がなかった。稿本の一括マイクロフィルム化と検索機能の充実で、稿本の活用が飛躍的に容易になる。近世・近代史、とりわけ明治維新史研究者にとって、まさに願ってもない朗報である。

近年、幕末・明治期の政治史研究の分野では、日本史籍協会叢書などの刊本の利用を中心としていた従来の研究に対し、その限界性が指摘されている。研究が進むにともない、日本史籍協会叢書に収載された日記・書翰・諸記録の再確認、さらにはそれ以外の原史料の検討がおこなわれるようになったのである。岩倉具視や木戸孝允・大久保利通についても、未収載史料の分析が課題となっている。この点、今回の大日本維新史料稿本も大半が未刊行の原稿である。稿本もまた維新史研究の新たな分野を切り開く貴重な史料といえる。

本年4月、創設12年目となる明治維新史学会から、最新の研究を収載した論集『幕藩権力と明治維新』(明治維新史研究、第1巻)が刊行された。年内には、第2巻の『明治維新の政治と権力』が続刊となる。明治維新史研究も、ふたたび活性化の時代を迎えている。今回の大日本維新史料稿本の出版が、このような近年の維新史研究をさらに刺激することはいうまでもない。その活用は、維新史研究のいっそうの発展につながるものと確信している。



明治維新史研究の宝庫

広島大学助教授
三宅 紹宣

「大日本維新史料(稿本)」(以下、「稿本」と略記する)は、明治維新史関係の史料を、弘化3年から明治4年まで編年的に網羅したもので、維新史料の宝庫といつてよい。事件の概要を示した綱文については、『維新史料綱要』(全10巻)として刊行されているが、その典拠となる史料そのものは、「稿本」によってしか見ることができない。その冊数は4217冊に及び、戦前にその一部が刊行されているが、それは編年でいえば、数ヶ月分にしかすぎず、これまで「稿本」の形によってしか利用ができなかった。

私は、1983年、東京大学史料編纂所に国内留学の機会を与えられ、半年間「稿本」の読破に没頭して過ごした。その時、よく整理された編年記事を読み進みながら、明治維新の実像が徐々に自分の頭の中に浮かび上がって来たことの感動を今でも忘れることがない。その時の印象から、「稿本」の特徴について、列記してみよう。特筆すべき第一は、一つの事件について、徹底して全国の史料が網羅されていることである。歴史上の事件について、一つの立場からだけでなく、出来るだけ多様な立場の史料をつきあわせることによって客観的評価を行うことが必要であるが、「稿本」は、そのことを徹底して実現している。たとえば、長州戦争の芸州口の戦いを例としてみると、長州藩や幕府側の史料はもちろん、動員された彦根藩・和歌山藩などをはじめとして全国諸藩の関連史料や、戦場となった地元広島の史料、さらには戦争に関する全国の風聞まで所収されている。それが編年体で日々の動きとして編集されており、まさに居ながらにして、分析に必要な史料を見ることができる。

このような史料の編纂が可能であったのは、維新史料編纂事務局の事業が大規模で、全国的な調査が行われたこともあろう。さらに、戦前においては各大名家の史料は、東京に移住した旧藩主のもとに置かれることが多く、史料が東京に集中していた便もあったであろう。たとえば、長州藩の場合でみると、戦前は高輪にあった毛利家文庫の史料がよく調査され、随所に盛込まれて

いることでも実感される。それは、あまりに大部であるため利用が容易ではない「浦鞠負日記」について、重要記事を摘出して、史料に入れていることでも調査の徹底ぶりがわかる。薩摩藩についても同様であり、藩の基本的史料はもとより、薩摩藩が政治判断に資するため全国の情報を収集したものにいたるまで多様な史料が盛り込まれている。この外の藩についても、とても個人の力では不可能なほどの豊富な史料が所収されている。

さらに、「稿本」に所収された諸藩や各地の史料については、現在においては既に焼失や散逸してしまったものもある。これは、「稿本」からたぐり寄せることによって、その復元が可能である。このことは、各地で進められている県史や市町村史の編纂にも、有益な史料を提供することを可能にする。自治体史の編纂事業では、全国的な調査までは手がまわらないこともあるが、「稿本」によって関係史料が居ながらにして見ることができる。このたび、丸善により「稿本」がオリジナルとしてマイクロフィルム化され、広く一般にも公開が可能になると聞いて、明治維新史研究はもとより、自治体史編纂の上でも画期的な出来事と思っている。

また、東京大学史料編纂所によって、検索のためのデータベースが構築されており、マイクロの利用が非常に容易になっていることも注目される。たとえば、高杉晋作の検索をコンピューターに命ずると、たちどころに34件の関係記事が打出され、あとは該当のマイクロフィルムの場面を見ればよいといった利用が可能である。検索は、地名や件名など多様な方法によってでもできるので、便利なことこの上ない。データベースと関連づけることによって、マイクロフィルムの利用はさらに生きたものとなるであろう。このような「稿本」の公開に踏み切られ、さらにデータベースを構築された東京大学史料編纂所、およびマイクロフィルム化を実現された丸善の社会的に価値ある事業に対して、深く敬意を表するとともに、これによって、明治維新史研究がさらに発展することを期待したい。

大日本維新史料稿本マイクロ版集成の 検索ツールとしてご利用できます!

維新史料綱要データベース

本データベースは、幕末維新史研究の最も基本的な文献の一つである「維新史料綱要(全10巻)」(東京大学出版会刊)から綱文(歴史上の重要事件を短く表現した文)の全文、年月日等を収録したもので、東京大学史料編纂所において作成されたものです。本データベースは、人名・官職・地名・事項名・年月日等で該当する綱文を検索でき、幕末維新政治史の基本的事実を網羅した年表データベースとして利用することができます。現在、文部省大学共同利用機関である学術情報センターにおいて、大学等の研究者に対しオンラインによる情報検索サービスが行われております。

なお、このデータベースの利用については、学術情報センター事業部共同利用係(Tel. 03-3942-6933)まで御照会下さい。

※本データベースに大日本維新史料稿本のマイクロ資料番号(リール番号、コマ番号)が収録される予定です。

■ 維新史料綱要データベースの利用



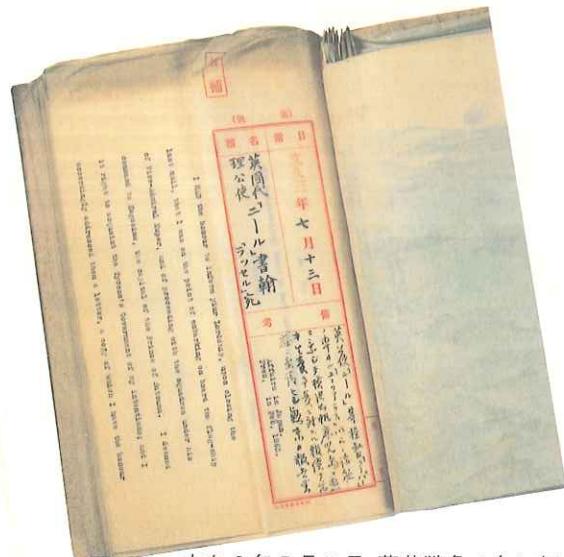
知音一
暮伏久光侍臣

収録資料から…
■主要なタイトル。

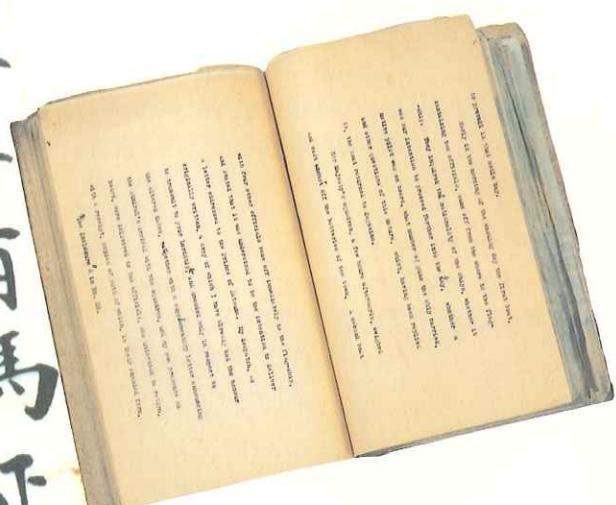
解説：東京大学史料編纂所 維新史料部門

宮地正人教授

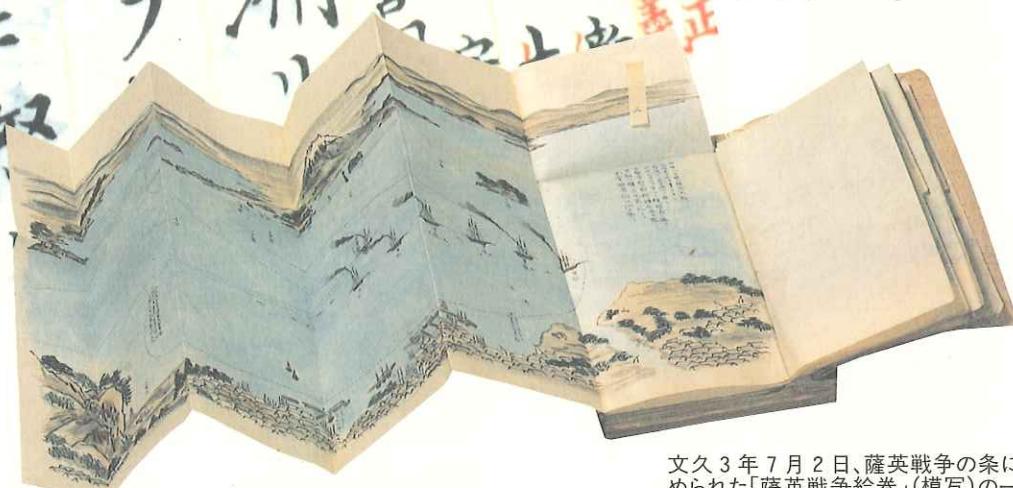
鹿兒島藩士有馬正義
河内誠介
元中山家士
虎太郎
重鄉
元郎高知藩士
等淀川ヲ湘
和泉
煎天宮
達シ逆旅寺田屋ニ憩フ



文久3年7月2日、薩英戦争の条に収められた、英國代理公使ニールの、ラッセル外相に宛てた、薩英戦争に関する詳細な報告書の冒頭部分。このように、収録史料毎に、日時、文書名、出典、概要等を示す短冊が付されている。



ラッセル宛ニール報告書の続きの部分。写真にあるのは、文久3年6月28日、伊地知景正等が旗艦に赴き、来意を問尋している箇所である。出典はBritish Parliamentary Papers、「史料稿本」は多くの歐文史料も収録している。



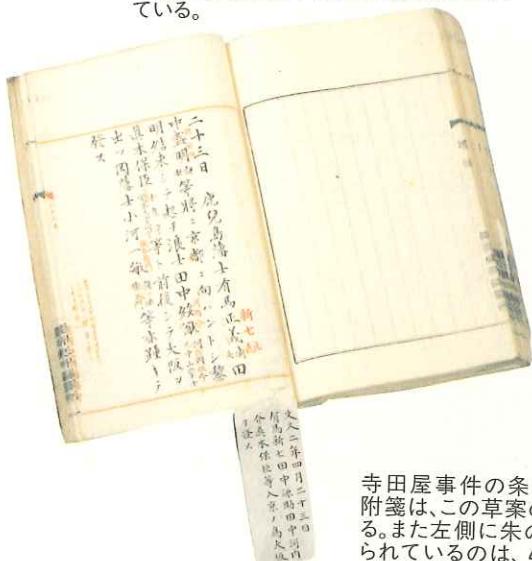
文久3年7月2日、薩英戦争の条に収められた「薩英戦争絵巻」(模写)の一部。鹿児島湾に進入した英國艦隊の動きが示されている。前景は焼失直前の鹿児島市街と砲台、後景は桜島。「史料稿本」にはこのような画像史料も収録されている。



文久2年4月23日、有名な寺田屋事件の条の綱文草案。朱書で随處に訂正が施されている。維新史料編纂事務局では、内部に綱文統一部を設け、綱文の統一化を図って『綱要』を出版したため、この部分は『綱要』では相当程度修正されている。



寺田屋事件に関与した諸集団の一つが、豊後岡藩小河一敏グループである。この写真は、事件の顛末を報ずる4月24日付の一敏書翰。出典は、維新史料編纂会所蔵の「変態事編」である。



寺田屋事件の条の綱文草案。附箋は、この草案の訂正案である。また左側に朱の細字で認められているのは、4月22日の条を見よとの参考注であるが、「綱要」においては、この草案は有馬新七等の項目と統一化された。



寺田屋事件には多くの諸国浪士も関与した。この写真は、事件にかかわった阿州浪人森是雄治郎を郡山藩が拘留した旨の同藩届書。出典は、伊藤尾四郎が提出した「磐城平風説書」である。



寺田屋事件の条は、数多くの史料を収録している。この写真は薩藩士は枝柳右衛門門の事件見聞記の冒頭を示している。史料は、臨時帝室編修局所蔵の「寺田屋事件記録」から取られたものである。



寺田屋事件は、有馬新七等が島津久光の鎮撫をはねのけて大阪から上京してきたため、引きおこされた。この写真は、久光の命を受け説諭を試みたが失敗に終わった旨を報ずる堀仲左衛門宛奈良原清(喜左衛門)書翰の冒頭部分である。

マイクロ変換で拓く維新史料の活用

1.書庫

東京大学史料編纂所内
大日本維新史料稿本の配架状況

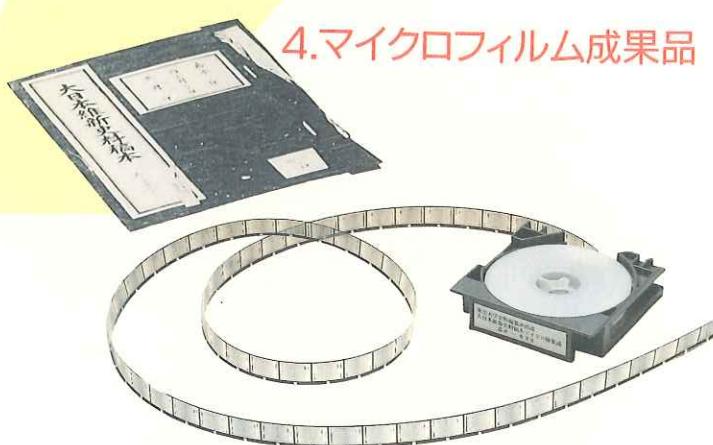


2.事前準備作業

裏写りを避けるため一枚一枚に
間紙を入れる作業



4.マイクロフィルム成果品



資料調査リスト
書誌事項、頁順、欠損、汚れ等をチェック

3.撮影

新しく開発された撮影機材と技術



5.活用

撮影・検査されたマイクロフィルム成
果品をFDIP6000リーダープリンター
で利用・検索・プリントアウト等



東京大学史料編纂所所蔵
大日本維新史料稿本マイクロ版集成

■出版計画

★セット価額¥19,895,000
4,217 冊、865 リール

和暦年代別ユニット

和暦年	冊数	リール数	価額
弘化 3~4	88	17	¥ 391,000
嘉永 1~6	276	57	¥1,311,000
安政 1~6	770	166	¥3,818,000
万延 1	100	20	¥ 460,000
文久 1~3	682	139	¥3,197,000
元治 1	320	68	¥1,564,000
慶応 1~3	841	172	¥3,956,000
明治 1~4	1140	226	¥5,198,000

●マイクロ仕様

*16ミリマイクロフィルム
*ダイレクト検索機能付
*シルバーハライド

*ポジ極性
*オープンリール/カートリッジ

●ご購入者への提供

* 和暦年代毎にリールガイド(主要な年月日順にマイクロアドレスを付与)が無料で提供されます。

注 * 収録の冊数、リール数は変更されることもあります。
上記価額は変更されることもあります。
ご購入の際には消費税が付加されます。



